

ホームページ展示解説 「花鳥山遺跡と諸磯式土器の展開」 後編

花鳥山遺跡から出土した渦巻状結節浮線文うずまきじょうけつせつ ふせんもんが施された土器は、諸磯もろいそc式という前期後半に使用されました。諸磯式とは東北・関東・中部に分布する土器で諸磯a・b・c式という3段階に変遷すると考えられています。この内、諸磯a・b式はほぼ同じ器形・文様で変化するとされていますが、諸磯c式だけは異なり、中部と関東で器形・文様が異なると指摘されています。中編で紹介した渦巻状結節浮線文うずまきじょうけつせつ ふせんもんが施文された土器（図1）は山梨・長野を中心として分布する土器と考えられています。これに対して、土器の口縁部てんぶもん（土器の縁）に貼付文が多数付けられた土器（図2）は主に群馬で分布する土器です。

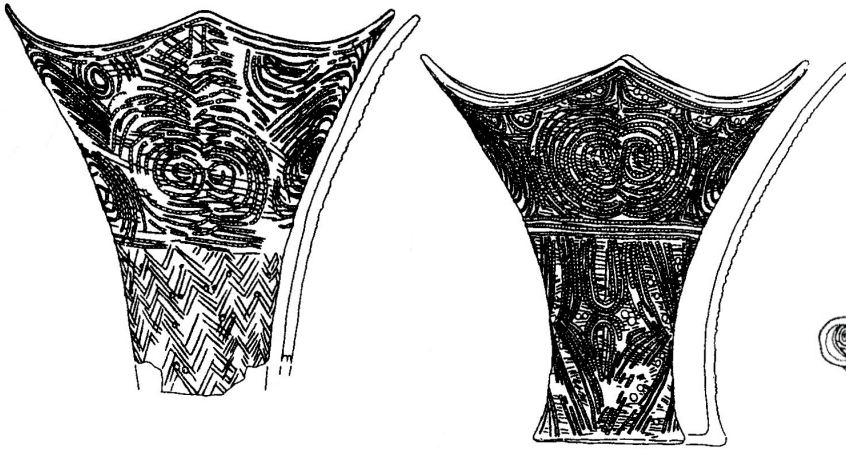


図1 山梨・長野を中心分布する諸磯c式

↓口縁部が平らな形であり、口縁部に耳状貼付文・胴部にボタン状貼付文などが施されることにより、過剰な装飾を有する外見となります。

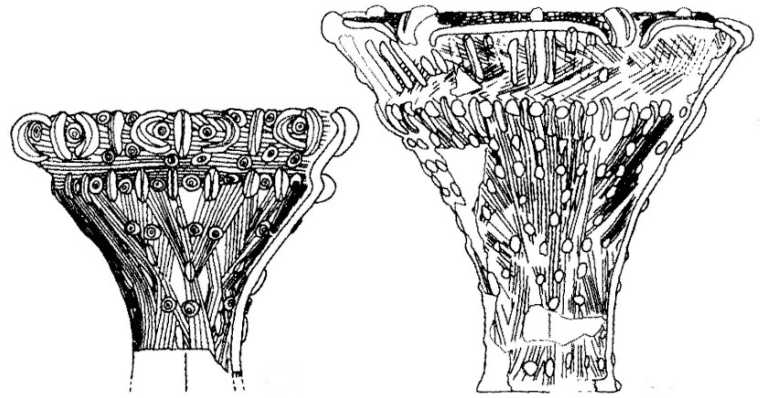


図2 群馬を中心分布する諸磯c式

↑口縁部が4単位に突き出る波状口縁という形であり、波頂部の下に渦巻状結節浮線文が付きまします。渦巻状結節浮線文が上下に施されるものもあります。

諸磯式の最終段階である諸磯c式は約5,900年前にあたり気候が冷涼化する時期と考えられます。関東では諸磯c式には遺跡数が減少しますが、これは気候の変化に原因があるのではないかと考えられています。一方、山梨・長野では諸磯c式においても環状集落かんじょうしゅうらく（中央に広場を設け、周囲に住居を配置する集落）が継続することから、人口減少が顕著ではなかったと想定されます。

先に述べた山梨・長野と群馬の土器の違いは地域差によるものとする説がある一方で、時期差を反映しているのではないかとする説もあります。すなわち、群馬を中心分布する土器うずまきじょうけつせつ ふせんもんは渦巻状結節浮線文より古い段階の土器であり、関東における人口減少により山梨・長野を中心分布する渦巻状結節浮線文を受容したのではないかと考えるものです。これらの説は良好な出土状態を示す資料が十分に把握されていないため、結論を出すのが難しい状況にあります。

諸磯c式において縄文時代中期に先立つ繁栄を享受した山梨・長野の縄文人も続く前期末にあたる十三菩提式じゅうさんぼだいにおいては遺跡数が激減します。気候の冷涼化により、定住的な生活を行うことが困難となり、移動しながら資源を獲得するように変化したものと考えられます。